

本宮彌兵衛の人とその心理学

荒川 歩

同志社心理No. 49. 2002抜刷

## 本宮彌兵衛の人とその心理学

荒川 歩<sup>1)</sup>

### Yahei Motomiya and his psychology

#### 1. はじめに

日本の心理学の黎明期、同志社英学校で学んだ元良勇次郎(1858-1912)、松本亦太郎(1865-1943)が日本の心理学の勃興に多大な影響を与えたことは良く知られている。この二人が心理学界に果たした役割については苧阪(1989)、竹中(1989)、荒川(2000)、佐藤(2002)および西川(2002)などによって報告されている。ところが、彼らと同じく同志社で学び、同志社大学心理学実験室の創設の中心人物であった本宮彌兵衛(1886-1957)については、昭和初期における一級の心理学研究者であったにもかかわらず、彼が日本の心理学界において果たした役割は過小評価されてきた。そこで、本研究では、本宮彌兵衛の人と、その業績について検討する。

同志社大学心理学実験室は、1927年、この本宮と、和田琳熊(1870-1944)を中心として創設された。松山(1989)は「同志社大学心理学実験室六十年史」のなかで、本宮と和田について紹介している。和田の心理学は、その後の心理学の流れとは異なるものであったが、本宮の志した心理学の伝統は、今なお受け継がれている。

#### 2. 本宮の人生

本宮の略歴については、他の資料で、すでに紹介されているので、ここでは、簡単に紹介する。

本宮彌兵衛は1886年に宮城県に生まれた。最初は医者として身を立てるべく、東京慈恵会医院医学専門学校に入学するが、内崎作三郎の感化で洗礼を受け、クリスチャンとなった。この

後、一時、早稲田専門学校の予科などを経て、1909年同志社神学校に入学、1914年には卒業し、神戸教会の伝道師となった。2年間は、伝道に力を注いでいた本宮であったが、2年後の1916年、さらに神学を学ぶためにアメリカへの留学を志した。本宮は、オペリン大学を経て、イエール大学で神学を学び、1918年にB. D.を取得した。しかし、留学前に書かれた「祈祷の心理」(1916)で、なぜ人が祈祷をするのかという問題についての実証的な研究を紹介したことからも分かるように、本宮の興味は、宗教としてのキリスト教にとどまらず、その心理的側面にも向いていたと考えられる。本宮は、イエール大学大学院では、心理学・教育学を学んでいる。

本宮がイエール大学でどのような研究を行っていたか、詳細はわからないが、「信念による治癒の心理学的研究」(1928)にはイエール大学のJohn E. Andersonの指導の元に行った実験として、下記の実験が紹介されている。それは心的活動が身体にどのような影響を及ぼすかを検討したものであり、数学科専攻の学生とフットボールの選手を被験者として行っている。まず、被験者を特殊な装置の上に寝かせる。この装置は、被験者の重心の位置で安定するようになっており、頭方向、足方向のどちらかに重心が移れば、そちらの方向に傾くようになっている。その状態で、数学科の学生に数学の問題を与えると、頭の側に傾き、フットボールの選手に100メートル走のことを考えさせると、足の方向に傾いた。このことから、思考の向かった点に血液が流動したと考察している。

<sup>1)</sup> 本論の作成にあたり、京都大学名誉教授の苧阪良二先生、同志社大学の鈴木直人先生、同志社大学社史資料室の本井康博先生から有益なコメントを頂いた。また、本宮彌兵衛先生のご子息、本宮啓氏には校閲していただいた。この場を借りて心から感謝の意を表する。

最終的に、本宮は、“A study on the progressive education by Mme. Necker de Saussure”で M. A. を取得している。この論文の内容について、現在では詳細が分からないが、Mme. Necker de Saussure (1766-1841) は、19世紀の女性や子どもの教育論に大きな影響を与えた *L'education progressive* の著者であることから、本宮の修士論文は教育に関する論文であったと考えられる。

イエール時代の本宮について、遠藤 (1957) などは、ヤーキース (Yarkes, R. M. 1876-1956) のもとで学んだとしているが、これは間違いの可能性が高い。本宮がイエール大学に在籍していたのは、1920年までであるが、ヤーキースがイエール大学の教授になるのはその4年後の1924年である。イエール大学の目録 (Yale university general catalogue) にヤーキースの名前が現れるのも1925年版からであり、本宮が指導を受けたとしても担当教授としてではなく、そのほかの形式である可能性が高い。同目録の1919年版によると、実験美学が専門の Roswell Parker Angier 教授 (Ross, 1947を参照) を中心に、前述の Anderson などによって、心理学、実験心理学、応用心理学、発生心理学、社会心理学などの授業が行われていたことがわかる。さらに、宗教の学科では、信仰の心理学 (Psychology of Religion) などの授業が行われている。

M. A. 取得後、本宮は、欧米をあちこち見て回る予定であった (本宮, 1957) が、同志社がちょうど新制大学へと昇級したので、呼び戻される形で、同志社大学助教授 (翌1921年から教授) に就任している。

本宮が同志社大学の助教授に就任したとき、まだ哲学科はなく、本宮も英語などさまざまな授業を教えていた。やがて哲学科の設置の構想が持ち上がり、心理学専攻もその構想の中であったため、心理学専攻設置の要件となる心理学実験室の整備をする必要が生じた。同様に心理学を担当することになる和田は、実験室創設時、

ベルリン大学に留学しているうえに、実験心理学には興味を持たなかったため<sup>2)</sup>、実際の実験室の整備は本宮がほぼ一人で行ったと考えられる。鈴木<sup>3)</sup>は、実験室を作る際、本宮から機材等について相談を受けたことを回想している。

本宮の努力の甲斐もあり、1927年、同志社大学には、私立大学では、4番目の心理学専攻として、心理学専攻が開設された。当時の実験器具について正確なことはわからないが、鈴木 (1989) には、実験室創設期から終戦直後までの機器の一部として多くの器具が紹介されている。ここでは、ストロボスコープやステレオスコープ、瞬間露出器、臭覚計等の知覚実験用の器具のほか、エルゴグラフや血流記録計、カイモグラフ等の生理学的な実験を行なうためのものも含まれていた。このほかに、当時、本宮が使っていた実験器具として松山 (1954) は、オーディオメーターによる基音振動数の測定、ガルバノメーターによる唾液及び尿中の水素イオン濃度の測定等を挙げている。さらに同志社で入手の困難なものについては、京都帝国大学の物理学実験室や心理学実験室、京都府立医科大学の精神科等に援助を受けて行っている (本宮, 1954)。

また、当時は私学への援助が少なかったため、本宮は東京に何度も足を運んで、友人の学会の有名人を訪ね、同志社大学文学部の発展に尽力した。その結果、1933年から1934年にかけて「声波及び言語の声波的構造に対する感情の影響」で帝国学士院から文科系で一番の額の奨学金が与えられた。このような奨学金が帝国大学の出身者ではないものに与えられることは、当時としては非常にまれであり、この奨学金をもとにして、本宮は同志社大学心理学実験室に当時としては珍しい防音室を作った。

当時は、大学の教員も少なかったため、本宮は、心理学概論、実験心理学、社会心理学、宗教心理学といった心理学関連教科だけではなく、教育学や宗教学の教科まで、幅広く担当してい

<sup>2)</sup> 「同志社心理」第8号 pp.11-13「心理学教室を回顧して」和田洋一の回想から

<sup>3)</sup> 「同志社心理」第8号 pp.11-13「心理学教室を回顧して」の鈴木信の回想から

た。そのために、本宮の著作はそれらの教科書として用いられたと思われるものを多く含んでいる。表1に本宮の著作を示す。表からも博士論文となった『精神構造の組織心理学的研究』を除き、論理学・心理学などの教科書が多いことがわかる。特に、『最新論理学』は第五版まで、増刷されている。このほかに、当時の本宮の授業をうかがわせるものとして、本宮が教授法の授業で行ったとされる試験の答案の一部が同志社大学社史資料室に保管されている。その答案のみから本宮の授業を類推することは不可能であるが、「新教育と宗教教育」(1935)の内容に良く似た授業だったのではないと思われる。

このように同志社大学において大きな役割を果たした本宮であったが、1954年には停年退職で教授から講師へとその地位を変え、1956年からは京都女子大学の教授になった。しかし、本宮は同志社の心理学から離れたわけではなかった。「同志社生活の回顧」(1957)では、哲学科の教授を離れたあとも、心理学専攻の学生たちの講義や実験指導に無報酬であっていたことが回想されている。

残念ながら、学位を取得して間もない1957年5月に本宮は病に倒れ、1957年10月23日、本宮は多くの人に惜しまれながら亡くなった。本宮の妻、みよしが書いているように本宮は本当に多くの人に愛されたと思われる。病床でも本宮の筆は止まることなく、「病中の記」(1957)「新道徳教育と人格の適応」(1957)を書き上げた。これらの論文は、ご遺族による文とともに、本宮みよしの手によって自家本「病床録」(1957)

としてまとめられている。

### 3. 本宮彌兵衛の心理学

本宮は日本心理学会・関西応用心理学会の設立直後から、もっとも活発に発表を行なった研究者の1人であった。遠藤(1977?)は、本宮について回想し、関西応用心理学会では、ほとんど毎回発表していたのではないかと指摘している。本宮自身(1957)も当時を振り返り、実験心理学者として自分が未熟だと考えていたので、日本心理学会の大会には毎回参加したと回想している。

実際に本宮が学会で行った発表を、表2に関西応用心理学会、表3に日本心理学会にわけ、それぞれ示した。表に「未見」とあるように当時のプログラムの中には現在では入手できないものもあるため、実際には、もっと多くの発表がなされたと考えられる。

表からわかるように特に本宮が研究を行なったのは、表情・音声・排出物のイオン傾向である。これらの研究の成果は、後に示すように、「応用心理」や「心理学研究」などの専門雑誌に発表され、最終的には、同志社の哲学科の紀要である「哲学年報」に「表情に関する特殊研究」としてまとめられている。

本宮のいくつかの研究については、論文や学会発表の抄録をもとに現在でも知ることができる。

「日本語母音のフォルマント及其感情による影響」(1935)は、学生及び助手の男女11人を用い、驚き、恐怖、悲しみ、喜び、無感情の5

表1 本宮彌兵衛の著作

出版年	タイトル	出版社
1923	論理学	日進堂
1949	キリスト教と文化	基督教教育同盟会編
1957	病床録	本宮みよし
1929	論理学概論	平野書店
1924	高等教育心理学概論	京文館
1929	最新論理学	平野書店
1957	教育心理学	峯書房
1957	精神構造に関する組織心理学的研究	比叡書房

表2 本宮彌兵衛の関西応用心理学会における学会発表

発表年	発表タイトル	発表学会名
(第1回から第3回発表なし, 第4回から第8回未見)		
1931	リズム意識の運動に及ぼす影響に関する一実験(村井為太郎と共著)	第9回関西応用心理学会
1931	スクリプチュア音声機器による英語音声の研究	第10回関西応用心理学会
1932	アーの音声に対する表情の影響	第11回関西応用心理学会
(第12回から第14回まで発表なし)		
1934	母音の音声学的研究	応用心理学会合同大会*1
(第16回から第18回発表なし)		
1936	線及び色彩による情調の表現	応用心理学会連合大会*2
(第20回発表なし)		
1937	郊外電車事故に関する研究	第21回関西応用心理学会
1937	感情と排出物の水素イオン反応との関係	第22回関西応用心理学会
(第23回・第24回発表なし, 第25回から第29回まで未見)		
(第30回から心理学会に発展的に解消し, 関西地方会と改称, 関西地方会第1回・第2回発表なし)		
1942	擬態に就いて	心理学会第3回関西地方会
(関西地方会第4回発表なし)		
1943	心理学上より見たる修練の問題	心理学会第5回関西地方会
(以後, 未見)		
* 1 東西の応用心理学会の共同開催であった。第15回関西応用心理学会に相当		
* 2 東西の応用心理学会の共同開催であった。第19回関西応用心理学会に相当		

表3 本宮彌兵衛の日本心理学会における学会発表

発表年	発表タイトル	発表学会名
(第1回発表なし)		
1929	信念に依る治癒の心理学的考察	日本心理学会第2回大会
1931	リズム意識の運動に及ぼす影響に関する一実験(村井為太郎と共著)	日本心理学会第3回大会
1933	感情の母音の声音に及ぼす影響	日本心理学会第4回大会
1935	日本語母音のフォルマント及其感情による影響	日本心理学会第5回大会
1937	顔面表情の研究	日本心理学会第6回大会
1939	唾液の水素イオン濃度と向性指数との関係	日本心理学会第7回大会
(第8回から第10回まで未見, 第11回・第12回発表なし)		
1949	学力検定としての総合試験法	日本心理学会第13回大会
(第14回から第17回未見)		
1954	心身交互作用に就いて	日本心理学会第18回大会
1955	人格の構造について	日本心理学会第19回大会
(第20回・第21回発表なし)		

つの感情状態とアの音のフォルマントの関係を検討した。その結果、驚きのときには、無感情のときに比べて、F1(第1フォルマント)の振動数が少なく、F2(第2フォルマント)の振動数が大きくなること、恐怖のときもF1の振動数が少なくなることなどを指摘している。

「唾液の水素イオン濃度と向性指数との関係」

(1939)は、Rich(1928)の実験に手を加えた実験の発表である。ここで本宮は、唾液がアルカリ性である度合いを「水素イオン濃度測定器」にて測定し、その結果と、淡路式向性検査票によって測定された向性指数との相関係数を測定している。結果的に相関係数は.295であり、無相関検定の結果、 $P. Er = 0.0898$ (ママ)である

が、余り相関関係が認められないので明確な判断を下すことはできないとしている。被験者は軍人47人であり、実験手続きとしても現在のスタイルに近い研究である。

「表情に関する特殊研究」は、女子学生39名を被験者とし、各自に苦痛・悲しみ・驚き・恐怖・憤怒・喜び・笑いの感情を喚起させ、その表情を自分で観察させている。その結果、喚起する感情によって、眉や目、口元などの動きに違いがあることを見出している。

当時の本宮の研究態度について、松山(1954)は、実験第一主義を重んじ、思考実験を避け、操作的な厳密性を保持していたと指摘しているが、これらの研究に見られる洗練された実験手法は、この指摘を支持するものである。まだまだ思弁的な実験の発表が多かった当時としては、本宮の研究は先駆的なものの1つであろう。

また、本宮は同志社大学神学部の紀要である「基督教研究」を中心に論文も盛んに発表している。表4は本宮の論文、表5は本宮の新聞などにおける記事を示したものである。

表から、本宮は多くの宗教や教育に関する論文を多く書いていることが読み取れる。当時日本屈指の生理心理学的実験心理学者であった本宮と、このような宗教家・教育者としての本宮は矛盾するようにも思われるが、この2つは、本宮の中では同じことであると思われる。

心理学的な主題を扱った本宮の論文においてたびたび繰り返されるのは、2つのテーマである。1つは、「精神なしの心理学」として行動主義を批判し、それと対比させて精神を対象とした心理学の重要性を説くという主題である。行動主義に対して、本宮は、マクドゥガル(McDougall)やシュテルン(Stern)などの機能主義心理学を高く評価している。また、本宮は人間の人格という側面を強調した人であり、人は全体として見なければならぬというのが、彼の持論であり、そのため、分析的な心理学を排し、ゲシュタルト心理学を高く評価している。

本宮の心理学に関する論文によく現れるもう1つの主題は、神経や脳を調べれば精神がわかるという「唯物論」的な考え方に対する批判である。「脳髄と精神の関係」(1923)は、心身相関の理論である並行説、唯物説、唯心説、相互作用説を論じ、神経組織の状態によって精神の状態が決まるという考え方を徹底的に批判し、相互作用説は採っているが、精神は脳だけではないという思想をつらぬき、精神が不滅である可能性を説いた。本宮は、感情喚起に対する生理的な反応を日本でも早くから取りあげた人物の一人であったが、このように本宮が感情や生理反応の研究に興味を持ったのもこの心身相関を顕著に示す現象として感情と生理反応を捕らえていたからであると考えられる。また本宮の学位論文である「精神構造の組織心理学的研究」(1957)も、この心身相関と言う主題を扱ったものであった。

当時の心理学は、学会だけではなく、個々の大学の学内における研究会も重要な発表の場であった。同志社の場合、特に当時の京都帝国大学との関係は非常に大きく、本宮も京都帝国大学の心理学研究会には参加していたようである。本宮は1934年に「精神とは何ぞや」というタイトルでこの研究会で発表している<sup>4)</sup>。それとは別に、表6に示したように同志社大学心理学会として研究会も開かれていた(本宮, 1934)。非常に短期間の報告しか残されていないため、この表から当時の状況を判断することはできないが、性格などが興味をもたれていた可能性を示している。

本宮は、研究発表だけではなく、関西の心理学界の運営に関しても大きな役割を担っていた(古武, 1977?)。実際に、関西応用心理学会の1937年の第21回大会、1943年の第33回大会が本宮を中心にして同志社大学で開催されている。日本心理学会に関連しても1939年には術語調査委員会の委員にも選ばれており、日本心理学会、応用心理学会、関西応用心理学会等が、心理学

<sup>4)</sup> 「心理学研究」第9巻 pp.997「京都帝国大学心理学教室記事」の「読書会記事」より

表4 本宮彌兵衛の論文

発行年	論文タイトル	雑誌名	巻	ページ
1916	祈祷の心理	六合雑誌	423	504 513
1917	米人の生活と思想	六合雑誌	435	38 43
1918	多元的唯心論に就て	新人	19	112 115
1919	遺伝学と国民教育	新人	20	64 70
1919	全経験より見たる実在	六合雑誌	464	18 25
1919	創造的経験より見たる実在	六合雑誌	465	17 32
1920	エール大学の学風	六合雑誌	468	98 99
1923	宗教教育の遺伝学的基礎	基督教研究	1	147 184
1923	脳髓と精神との関係	基督教研究	1	236 268
1923	人格の意義	基督教研究	1	470 489
1924	愛の心理学的考察	基督教研究	2	145 161
1924	宗教経験の妥当性	基督教研究	2	415 429
1925	自由意志の進化論的考察	基督教研究	3	31 43
1925	靈感の心理学的考察	基督教研究	3	357 374
1925	宗教の教育に於ける位置 (宗教教育その一)	基督教研究	4	611 638
1926	宗教的教科構成の原理 (宗教教育その二)	基督教研究	4	270 287
1926	幼稚科の宗教的教科 (宗教教育その三)	基督教研究	4	433 450
1927	初等科の宗教的教科 (宗教教育その四)	基督教研究	5	102 120
1927	わが国に於ける宗教対教育の問題	基督教研究	5	196 217
1927	中等科の宗教的教科 (宗教教育その五)	基督教研究	5	445 465
1928	高等科の宗教的教科 (宗教教育その六)	基督教研究	6	82 107
1928	青年科の宗教的教科 (宗教教育その七)	基督教研究	6	255 273
1928	信念による治癒の心理学的考察	基督教研究	6	304 320
1929	教育の理想としての神の国	基督教研究	7	199 371
1929	知恵文学に現れたる教育思想	基督教研究	7	359 379
1929	愛とは何ぞや	基督教研究	11	378 392
1930	タルムードに現はれたるユダヤの教育	基督教研究	8	141 151
1932	宗教心理学の方法	基督教研究	9	445 457
1932	宗教性とは何ぞや	基督教研究	10	28 40
1932	言語記器による英語の聲音的構造の研究	応用心理	2	23 32
1934	宗教教育の新傾向	日曜学校	21	15 19
1935	ヘプルの医学と疾患に就いて	基督教研究	12	325 341
1935	精神とは何ぞや	基督教研究	13	86 331
1935	新教育と宗教教育	基督教研究	13	309 331
1935	日本語母音のフォルマントに就いて	心理学研究	10	831 837
1935	宗教々育の問題	教育学術界	71	116 125
1936	不滅信仰の学的基礎	基督教研究	14	203 222
1937	宗教心理学の最近の研究	基督教研究	15	47 51
1938	表情に関する特殊研究	哲学年報	1	193 236
1938	舊新約聖書に現はれたる精神観	基督教研究	16	340 353
1939	幼児心理学 (第一部)	保育	28	32 37
1939	幼児心理学 (二)	保育	29	42 48
1939	幼児心理学 (完)	保育	30	18 24
1940	生死の問題	基督教研究	18	118 154
1942	心理学の対象の問題	哲学年報	3,4	151 174

発行年	論文タイトル	雑誌名	巻	ページ
1942	吉利支丹教育のわが国文化に対する貢献	基督教研究	20	95 122
1947	学校と宗教教育	基督教研究	22	269 286
1948	臨床心理学と宗教教育	基督教研究	23	332 345
1951	心理学的唯物論批判	基督教研究	26	212 222
1956	人間関係と情緒	同志社心理	5	13 17
1957	新道德教育と人格の適応	病床録		15 15

表5 本宮が新聞などに発表した記事

発行年	論文タイトル	雑誌名	号	ページ
1919	ゼームス・ワードの哲学に就て	基督教世界	1861	4 4
1920	愛の心理	基督教世界	1936	3 3
1921	基督教大意 (一)	基督教世界	1940	4 4
1921	基督教大意 (二)	基督教世界	1941	3 4
1921	基督教大意 (三)	基督教世界	1942	4 5
1921	基督教大意 (四)	基督教世界	1943	3 4
1921	基督教大意 (五)	基督教世界	1944	3 4
1921	基督教大意 (六)	基督教世界	1945	4 5
1921	基督教大意 (七)	基督教世界	1947	4 5
1922	新時代の神秘主義 (一)	基督教世界	1991	3 3
1922	新時代の神秘主義 (二)	基督教世界	1992	4 5
1923	夏季学校に就いて	基督教世界	2117	8 8
1924	基督教世界	基督教世界	2146	4 4
1925	読書の心理と読物	基督教世界	2214	2 3
1925	クリスマスの由来と其意義	基督教世界	2242	1 1
1927	礼拝を厳肅にせよ	基督教世界	2244	3 3
1930	征服の喜び	基督教世界	2428	5 5
1930	教会夏季学校に就て	基督教世界	2421	7 7
1932	講習会講師としての所感と希望	基督教世界	2517	7 7
1937	教会員とその家族のために	基督教世界	2778	6 6
1938	産科及大人科の問題	基督教世界	2880	6 6
1940	イエスの教訓に於ける独創性	基督教世界	2918	6 6
1940	海老名先生を憶ふ	基督教世界	2931	2 2
1940	近刊紹介：和田琳熊氏訳 一心理学者の見たる基督	基督教世界	2919	8 8
1941	幼稚園、国民学校時代の児童の心理は如何なるものか	基督教世界	2987	5 6
1941	児童の心理 一前青年期又は少年少女時期—(満十二・三・四歳)	基督教世界	2998	5 6

表6 同志社大学心理学会報告 (本宮, 1934)

開催日	発表タイトル	発表者
1月15日	Aloes Muller の現象学的心理学について	本宮彌兵衛
1月26日	現代性格学の一つの傾向、特にクレッチマー及びクラークスについて	寺尾清吉
2月2日	性格と環境	大石保明
2月23日	精神分析学の発展	土井正明



会として統合されたときには、評議員の1人に選ばれている。

応用心理学会における積極的な働きからも窺えるように、本宮は心理学の応用的側面に常に気を配った人であった。たとえば「臨床心理学と宗教教育」は、現在の知識から言えば間違っていると思われるものも含まれているが、精神分析療法を批判し、住みやすい環境を整えることで治療を行なう森田療法を高く評価している点は本宮の心理学の特徴をよく示している。本宮は、ここに教会が従来果たしていた役割を認めている。

これとはまったく異なった側面であるが、1943年、同志社の学生6人を本宮が引率して、東京に旅行し、東大航空研究所(航空心理学)、北里研究所(大脳生理学)、東京文理大学(教育心理学)、労働科学研究所(産業心理学)、愛育会研究所(発達心理学)等心理学が用いられている実際の現場を見学して回る旅行が組まれた(中根, 1989)。これは実際には、本宮の発案ではなく、学生側の要望から起こったものであったが、実際に見学場所を設定したのは本宮であり(渡辺, 1961)、本宮が心理学の応用について強い意識を持っていたことを示していると思われる。本宮は優れた実験心理学者であり、また基礎分野だけではなく応用分野に対しても広い視野を持っていたことが分かる。

また、本宮は、戦後の日本の心理学にとって重要な意味を持つことになるグラハム・セミナー(佐藤・苧阪・本吉, 1953を参照)にも世話役の1人として関わっている。

#### 4. 本宮の思想

本宮の思想において、重要な意味を持ったのは、キリスト教との出会い、およびアメリカでの体験である。本宮は、留学している間に、「米人の生活と思想」(1917)「多元的唯心論について」(1918)「全経験より見たる实在」(1919)「遺伝学と国民教育」(1919)「創造的経験より見たる实在」(1919)「エール大学の学風」(1920)の6篇を書いている。特に「米人の生活と思想」「エー

ル大学の学風」の2篇からは、本宮がアメリカでの生活に大きな感化を受けたことが読み取れる。この中で、本宮が殊に感心しているのは、アメリカの学校では、教育が強制的になされるのではなく、学生によって自発的に選択されており、生活においても個々人の自由が最大限に許されている点である。本宮は、人間は自由意志をもつ独立した存在であるという信念をもっていたが、これもこのアメリカでの体験が大きかったと思われる。本宮のこの信念の影響はほとんどすべての論文に現れている。

たとえば、心理学においては、身体から独立した精神と言うものを考えたところからも明らかであるし、教育学においても、本宮はフレーベルやルソーの立場を支持し、アメリカにおいて本宮が感化を受けたように、個人の尊厳を重視し、自由を重んじ、個人の適性にあつた教育を施すという立場をとっている(「新教育と宗教教育」(1935))。また、生物学においても「自由意志の進化論的研究」(1925)でみられるように機械論的な進化論を排し、生氣論的な立場をとっている。本宮の進化論思想にはベルクソンの生の躍動(elan vital)の影響が強く見られる。また、「遺伝学と国民教育」(1919)や「宗教教育の遺伝学的基礎」(1924)に見られるように本宮の進化論は、時代的な背景もあつて優生学=劣廃学的な傾向も見られるが、ここでも本宮は各自の自由意志を尊重しているため、緩やかなものとなっている。

また、「キリスト教と文化」(1949)で、本宮が、キリスト教が近代的な生活に与えた影響を論じたことから分かるように、本宮の思想を理解するには、彼がキリスト教をどのように考えていたのかを避けることができない。

特に本宮が、神経や脳髓の役割を認めていたにもかかわらず、最終的に、精神の本源を神経に還元せず、精神固有のもの存在を認められたのも、彼の宗教観によるものではないかと思われる。本宮によると、精神が経験を積むことにより発達することは事実であるが、もともと精神が含んでいないものを精神がどのように取り込

むことができるかは神経だけでは説明できないとしている。その際、どうしてもわれわれの体験していない外界の存在を認めなければならぬので、神の存在が重要になると論じている。さらに、「不滅信仰の学的基礎」(1936)では、この論を推し進め、精神の不滅を考えている。

また、「宗教の教育に於ける位置(宗教教育その一)」において、本宮はキリスト教が最高宗教であり、他の宗教もいずれはキリスト教に置き換わるべきものであると考えていた。しかし、戦後に発表された「学校と宗教教育」(1947)では、キリスト教を他の宗教と並列のものとして捕らえている。キリスト教は戦中不利な立場に立たされる傾向にあったが、そのような体験が本宮をより温和な宗教観へと変貌させたのであろう。

## 5. 最後に

本宮は、戦中に制度的な問題で心理学のある文学部哲学科の教授ではなく神学部教授に移ったが、その本質は、最後の最後まで、心理学者であった。亡くなる間際に行った博士論文が心理学を主題としたものであったことは、まさにこのことを示している。現在では科学が進み、本宮の危惧していたように、脳科学が心理学よりも優先される傾向がますます強くなっていると思われる。おそらく現代の心理学者、心理学徒の目から見れば、靈魂の不滅を論じる本宮の「精神」についての理論は非科学的な神学者としてのそれに映るであろう。しかし、本宮は実験で実証されたことについては常に謙虚であり、その態度は科学者そのものであった。現在の人間にとって未解明な心の中の部分を本宮が神にゆだね、現代の人は脳にゆだねているに過ぎない。それは信仰の対象の問題であり、現代の人々が「脳」という信仰対象を妄信しているに過ぎないのかもしれない。少なくともどちらが科学的であり、どちらが非科学的であるとはいえないであろう。本宮は、何よりも心というものに直接向き合い、その意味を問い続けた人であった。一方、現代の心理学は、「精神とは何ぞや」

という本宮が考え続けた問いに答えるものではなく、細切れのものになりつつある。われわれが本宮から学ぶものは少なくないであろう。

## 引用文献

- 荒川 歩 2000 ジョンズ・ホプキンス大学入学以前の元良勇次郎 心理学史・心理学論, 2, 17-23.
- 遠藤汪吉 1957 本宮彌兵衛教授を追悼して 心理学研究, 27, 177.
- 遠藤汪吉 1977? 亡き先輩諸学の思い出など 関西心理学会五十年の歩み pp.4-6.
- 古武弥正 1977? あの頃の先輩心理学者のことども 関西心理学会五十年の歩み pp.7-9.
- 松山義則 1954 本宮先生について 基督教研究, 27, 217-219.
- 松山義則 1989 初代教授 「同志社大学心理学研究室六十年史」編集委員会(編) 「同志社大学心理学研究室六十年史」 pp.16-20.
- 本宮彌兵衛 1934 同志社大学心理学会報告 心理学研究, 9, 364.
- 本宮彌兵衛 1954 心理学教室の思い出 探求者, 10, 33-34.
- 本宮彌兵衛 1957 同志社生活の回顧 基督教研究, 30, 11-15.
- 中根冬雄 1989 戦時中の心理学専攻生としての私の思い出 「同志社大学心理学研究室六十年史」編集委員会(編) 「同志社大学心理学研究室六十年史」 pp.107-109.
- 西川泰夫 2002 わが国への心理学の受容と定着過程を担った先達たち——外国留学、並びにわが国の教育機関との関わりから 心理学評論, 44, 441-465.
- 荻阪良二 1989 初期実験心理学の人々と心理学の発展—ヴント、元良勇次郎、松本亦太郎をめぐって— 「同志社大学心理学研究室六十年史」編集委員会(編) 「同志社大学心理学研究室六十年史」 pp.216-235.
- Rich, G. J. 1928 A biochemical approach to the study of personality. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, 23, 158-178.

- Ross, R. T. 1947 Roswell Parker Angier. *Psychological Review*, 54, 117-119.
- 佐藤幸治・苧阪良二・本吉良治 1953 Graham seminar 教授を中心とした実験心理学セミナーについて 心理学研究, 23, 194-196.
- 佐藤達哉 2002 日本における心理学の受容と展開 京都: 北大路書房
- 鈴木直人 1989 実験室における機器の変遷 「同志社大学心理学研究室六十年史」編集委員会(編) 「同志社大学心理学研究室六十年史」 pp.87-92.
- 竹中正夫 1989 創設期の同志社と日本の心理学—元良勇次郎と松本亦太郎をめぐって— 「同志社大学心理学研究室六十年史」編集委員会(編) 「同志社大学心理学研究室六十年史」 pp.160-215.
- 渡辺英一 1961 回想の心理学教室—私の学生時代— 同志社心理, 8, 57-59.